

## (研究会の記録)

[ 脇・心霊講座より ]

### 「守護霊研究」事始め(2)

#### 霊媒の背後の支配霊

つぎに浅野先生は当時の有名霊媒の守護霊、厳密には支配霊について紹介されている。

しかしながら、一層有力に守護霊の存在を証明する資料を提供したのは、近代心霊研究の勃興以降であります。言うまでもなく、心霊現象の作製に不可欠の道具は霊媒であります。そのまた霊媒の作製に不可欠の道具は、いわゆる支配霊で、千百人中にただの一つの例外もないのであります。これは理屈でも何でもなく、もっぱら学者の実験報告に基づける、赤裸々の事実なので、そのまま承認して戴かねばなりません。これを承認しまいとするところに、現代日本国の精神的停顿、またその思想的行き詰まりの大部分が胚胎しておりはせぬかと思考されます。

心霊研究の勃興以来、輩出した知名の霊媒ばかりでもなかなか多く、とてもここにその全部につきて、支配霊の紹介をすることはできかねますので、なるべく人口に膾炙せるものだけを、以下に紹介することにいたします。

- (1) スティントン・モーゼス：この人は自動書記の大霊媒で、あの有名な「霊訓」を学界に寄与してだけでも、すばらしい功績であります。この霊媒の背後には、一団の支配霊が控えております。それらの中でインペレータというのが、言わば団長格であり、その補助霊としてはレクトルというのが最も優れております。
- (2) ウィリアム・ステッド：この人は「評論の評論」を主宰している多忙な身でありながら、自身に自動書記能力を發揮し、ジュリアと称する一人の女性の霊魂から、つぎつぎと通信を受け取った事は、あまりにも有名な話です。この通信は「ジュリアの通信」と題して刊行され、現に邦訳もあります。このジュリアは生前ステッドの親友でしたが、実によく生前の性格、記憶等を保存しており、動かすことのできない確証を、いくつも挙げました。是非熱心なる研究者の

一読を要する好著であります。

- (3) レナード夫人：この人は、現在世界中でおそらく一番すぐれたる霊言現象の霊媒かと考えられます。ドレートン・トマス氏の「死後の生活の確証」と題せる好著をひもとけば、女史の優秀さは実によく判ります。氏は10有余年にわたり、毎月1、2回づつ女史を実験しておる篤学者で、先年、私を女史の閑居につれて行ってくれたのも、実にこのトマス氏でした。女史の背後に活動している支配霊は、フィーダと称するインド生まれの可憐なる少女で、いくらか訛った英語をしゃべり、他界の靈魂たちの通信を、きわめて熱心確実に取り次いでくれます。フィーダのお蔭で、死後個性の存続ということが、どれだけハッキリしてきたか知れないくらいです。
- (4) パイパー夫人：現在はもう老境に入りましたが、それでも霊媒の仕事を放棄してはいないようです。夫人の支配霊は3回ほど変わりました。第1期の支配霊はフィニューイ博士と名乗る、いささか気まぐれ式の人物でした。第2期は1892年以降に属し、主としてジョージ・ペラムと称する近代人の霊がかかり、その時代において最もよく個性存続の確証を挙げました。第3期は1897年からはじまり、以て今日に及んでいます。この期の支配霊は、例のモーゼスに懸ったインペレータ団で、ここに至りて宗教的色彩が最も濃厚であります。支配霊の変化につれて、夫人の入神状態は、ガラリと一変するらしく、霊媒として夫人のように適応性を有している人は滅多にいないようです。(このパイパー夫人の研究家ホジソン博士の報告によると、ある日博士の秘書エドモンズ嬢が、交霊実験を行った際に、同嬢の亡妹は霊媒の右手、支配霊のペラムは左手を使い自動書記を行い、おまけにフィニューイ博士が口をつかって言葉を発し、3人同時同時に完全な通信をよこしたということです。)
- (5) ワード：「死後の世界」「幽界行脚」の2名著でご承知のとおり、その支配霊は叔父のL氏、著名な陸軍士官、弟のレックス等であります。これらは何れも近代人ですが、これらの支配霊の外に、各人の背後に守護霊がついていることは、上記の2書中至る所に力説されております。この事は後で述べます。
- (6) クック嬢：クルックス博士が生涯の心血を傾注し、3年がかりで実

験した物質化現象の名霊媒ですが、その支配霊はケティー・キングと称する美貌の婦人で、立派な写真も撮れております。ケティー自身の告白するところによれば、彼女がウエールズの産で、生時の姓名はアニー・オーウェンス・モルガンと称し、冒険的海賊の妻であり、時代はチャールズ 世（17世紀の初期）の御代だったということでもあります。

- (7) ゴライアー嬢： ご承知のとおり、故クロフォード博士が徹底的に実験したアイルランドのテーブル浮揚霊媒で、博士の死後は、しばらく実験を中止していましたが、最近また開始したという報告に接しました。この霊媒の背後にも、幾人かの支配霊が控えておりますが、クロフォード博士は非常に用心深く、わざとこれらに関する詳しい記述を差し控えています。それでもその著「心霊現象の実際」の序文に、こんな事を書いております。「私は本書中に、わざと他界の世話役たちの消息を述べませんでした。その研究は他の機会に譲ります。が、誤解を避けるべく、私はここに言明しますが、私自身としては、それらの世話役たちが何れも人霊であることを確認しているものであります。」以て、博士がいかに支配霊の存在を確認しているかは判りましょう。それらの支配霊の一人は生時において医師であり、実験中霊媒の健康状態を監視する役目だそうであります。詳細は前著の巻末に近いところをご覧ください。
- (8) クランドン夫人： 同夫人の背後に控え、直接大車輪の活動をしつつある支配霊は、その亡兄のウォルターであることは、皆様もご承知の通りであります。私は前年、右のウォルターの霊と談話を交換したり、物質化せるその手首を握ったり、またその右手の指紋を作ってもらったり、ほとんど人間臭い交際をしましたので、何だか彼が他界の住人であるような気がしません。
- (9) ウイングフィールド嬢： 自動書記のすぐれた霊媒の一人で、「他界からの指導」と題せる好著を発表しております。上の支配霊はHだの、Eだの、Iだのと沢山ありますが、略字を用いてあるので、詳細は知りません。
- (10) スコット女史： 現在自動書記霊媒として断然群を抜いており、「4人の死者から」「果たしてウイルソンか？」等を出しております。

その支配霊は何れも近代人で、その亡夫の H. F. N. スコットをはじめ、例のステッドなども非常に有力な通信をよこしております。現在私が紹介中のウイルソンの通信も、なかなか優秀だと思います。

- (11) ヴァリアンタイン： 現世界で随一と称せられる直接談話の霊媒ですが、その背後にはブラック・フォークと名のるインド人の支配霊が活動しており、実験の際にはすてきに大きな蛮声を張り上げて空中から怒鳴ります。他にもバーネット博士、その他数名の支配霊が控えて、それぞれの分担をしております。

際限がないから西洋の方はこの辺で切り上げ、今度は、私が実際取り扱いつつある、日本の霊媒たちの支配霊を少しばかり挙げてみましょう。

- (12) 中尾良知氏： 中尾氏の守本尊は、従来ただ漠然と、金比羅様ということになっていましたが、私が昨年入神中中尾氏を追及の結果、直接中尾氏を使って仕事をしているものは、徳川時代に男性の霊魂であることをつきとめました。霊視能力者をして偵察せしめても同様であります。ただし、その人の姓名は未詳です。
- (13) 中西りか女史： 妙山と名乗る龍神が支配霊で、これは入神状態において至極淡泊にそう自ら名乗ります。霊視能力で偵察の結果も同様あります。
- (14) 亀井三郎氏： インド人モゴールと名乗るものが支配霊で、他にもその補助霊が沢山ついているようです。右のモゴールは、直接談話で破格の英語をしゃべったり、直接初期で英文の手紙をよこしたり、またたまには物質化してその姿を見せたりもします。ただし、そのモゴールというのが実名かどうかは到底確かめられません。

以上の実例を見れば霊媒の背後に、必ず一人乃至数人の支配霊が憑いている事は、もはや確定的事実であると観てよいかと考えます。時代におもねる学究たち（フランスのリシェ博士などもその一人）はなるべくこれを承認することを避け、いろいろまわりくどい仮説を提唱しますが、当然納得しうるものはありません。霊界通信その他心霊現象の内面的機構は、どうあっても支配霊の存在を仮定することなしには、満足に説明しかねるように信じられます。

ただし、霊媒の背後に支配霊が存在するという事実と、各人の背後にことごと

とく守護霊が控えていることとの間には、まだまだ大分の距離があります。これから数ある霊界通信中から、上に関するもっとも有力なるものを抜粋して見ましょう。